

マイ・フェア・プレジデント

午後六時——終業の時刻を迎えると、私はまとめておいた荷物を手にしてすかさず席を立った。「お先に失礼します」

「お疲れさま——あ、ねえねえ、有村さん<sup>ありむら</sup>」  
頭を上げたところで、同僚の女性に声をかけられる。

「このあとご飯でも食べに行こうかって話してたんだけど、良かったらあなたもどう？」  
彼女の背後には数人の女性社員が輪を作り、就業時間中とは違うリラックスした表情で歓談していた。金曜の夜ともなれば、そういう流れになるのも自然だろう。

「すみません、ちょっと用事があります」

「そう、残念だわ。じゃあ、またの機会にね。お疲れさま」

「ありがとうございます。お疲れさまです」

私はもう一度頭を下げると、このあとの予定をあれこれと楽しそうに語り合う彼女たちを尻目にエレベーターホールへと向かった。

「有村さん、やっぱり帰っちゃったんだー。相変わらず付き合い悪いよね」

途中で若い女性特有のよく通る声が耳に届いたけれど、聞かなかったことにしてオフィスを出る。時折冬の寒さが顔を覗かせる十一月は、日が落ちるのも早い。忙しさにかまけていると、あつという間に日々は過ぎていく、と眩しくもないのに目を細めた。

毎日同じ時間に通るこの道だつてカレンダーを捲るたび、肌に感じる空気の冷たさや木々の葉の色なんかが確実に変わっていくのだ。

そんな季節の移り変わりに思いを馳せながら、ハンドバッグから携帯電話を取り出し、リダイアルの一覧から「フェリア〈事務所〉」という項目を探して通話ボタンを押す。

「はい、『フェリア』です」

「もしもし、お疲れさまです。レイナです」

ぴつたり、コール二回待ってから出たのは少し高めでクリアな男性の声。

三上さんだ。

「今から向かいます。七時前には着くと思いますので、よろしくお願いします」

『はいはい、了解。待ってるよ』

プツツ、という小気味いい音で通話が切れたのを確認してから携帯をたたみ、再びバッグに押し込むと、私は時間を気にしながら駅までの道のりを駆けていった。

勤務先の最寄り駅であるJR吉祥寺駅から中央線に乗り、丸の内線に乗り換えて三十分とちょっと。乗換えや徒歩の時間を含めて五十分もあれば、事務所のある銀座にはゆうに辿り着くことがで

きる。銀座の外れにある雑居ビルの一室のインターホンを押してから、私はそのドアを開けた。

「おはようございます」

「おはよう、レイナ」

ドアの正面にある奥のデスクで、何やら書類と睨めっこしていた三上社長が、私の挨拶に顔を上げた。

ほらかな笑みに隠された猛禽類のような眼光の鋭さが、いかにもやり手といった風。年齢はまだ三十代後半だと聞いた。褐色に近い肌とセンターパートの黒髪、そして何ととってもドギツイシルバーのスーツが、派手好きな印象を与える。

「今日の店はまだ決まってるないんだ。ちょっと準備して待ってる」

「はい、わかりました」

社長に領きを返しつつ、既に何足かのブーツやパンプスが脱ぎっぱなしに置かれた玄関口で、私は履いていたパンプスを脱いで端によせた。

デスクの手前には、旅館の宴会場のように長々と白いローテーブルが並んでいる。

そのテーブルの上にはヘアスプレーやドライヤー、ホットカーラーにコテなど、ヘアメイクに必要なありとあらゆる物が置いてある。

「あ、レイナさんだ。おはようございますー」

明るい声に視線を向けると、テーブルの一角で綺麗なミルクティー色の髪を梳かす女性の姿があった。流行りのモテ系ファッション誌から、そのまま飛び出てきたような彼女。

「ユリちゃん。おはよう」

その子の名前を呼び、私はそのまま彼女の隣に陣取った。

「今日は早いなだね」

「そうなんですよー、今日は午後の講義がなかったから暇で。行くところもなくなくなっちゃったから、事務所で時間潰そうかなって」

人懐っこい笑顔を浮かべ、ブラシを動かしながら彼女が答える。

「そっか、そういえば大学生だっけ。授業のあとにこういう仕事って、大変じゃない？」

ユリちゃんはホットカーラーを電源タップにセットしながら首を横に振った。

「全然。人と話すのって嫌いじゃないから。むしろ楽しんでやってるくらいです」

「そうなの」

「それを言うならレイナさんの方がよっぽど大変だなんて思いますよ。レイナさん、昼間も働いているんでしょう。何のお仕事でしたっけ？」

「事務だよ。派遣だけだね」

私は小さく笑いながら、オフィス仕様にまとめていた髪を解き、テーブルの下に無造作に積まっていた鏡を取り出して手前に立てた。

「ダブルワークってことですよ。すごいなあー」

「すごいってほどでもないけど……派遣のお給料だけじゃ心許なくてね」

「でもキツくないですかー？ 私みたいに学生なら、どうしても疲れたときとかは講義中に睡眠と

ったりできますけど。社会人だと大変そう」

自分には無理だと言わんばかりに首を振った彼女の瞳には、くつきりと存在感がある。つけ睫毛なのか、毛先がくるんとカールしていて、まるでお人形さんみたいだ。

「最初は大変だったけど、今はどうにか慣れたかな」

「ホントですかあ？ しかもレイナさんと私って結構会いますよね。今週はどれくらいシフト入ってるんですか？」

「今週は週五かな」

「週五!？」

ユリちゃんは信じられないというように、そのお人形さんのような愛らしい瞳を丸くした。そして、ヘトヘトに疲れたような顔をする。

「レイナさん、よく身体持ちますね。この仕事好きだけど、私だったら無理だなー」

「だから、慣れだよ慣れ。私にとってはこれも生活の一部になりつつあるから」

「そんなあ。それじゃ、友達とかカレシとかと会ったりする時間ってどうしてるんです？ やっぱ、週末中心になっちゃうんですかね？」

「……そんなところ、かな」

さも当たり前のようにそう訊かれてしまうと、一瞬返答に困ってしまう。けれど、私は話が途切れないように曖昧な言葉を返した。

「ユリー、ちょっと!」

そのとき、助け船のように社長の声が降ってきた。

「はーい。っと、レイナさん、ちょっとごめんさい」

ユリちゃんは軽く頭を下げながら立ち上がり、社長のもとへ向かった。

三上さんが社長を務めるこの『フェリア』は、銀座エリア限定の人材派遣サービス会社だ。派遣先は、主に銀座のクラブやスナック、ガールズバー。早い話が、夜の蝶ということだ。

普通、ホステスっていうのはお店に籍を置くものだけど、『フェリア』の場合は会社に籍があり、依頼があった契約店に時間単位で仕事をしに行く。

お店に雇われて働くのと違ってノルマや残業がなく、勤務時間も自分で選べる手軽さから、フリーターはもちろん学生や会社員も多く在籍している。

レイナこと私もその中で、昼間は派遣事務として働きながら、週に四、五回『フェリア』に出勤しているのだ。

ユリちゃんが席を離れている間に、温めていたカーラーで髪をアップスタイルにしていく。つまり「盛る」。

お店で働いている子は美容室できちんとセットしてもらってから出勤するものだけど、私たち派遣スタッフは自分でやらなければいけない。

しかも、派遣されるお店によってはかなりボリュームを出して派手に盛らなければいけない。私はいくつかのことが苦手なので、身につけるまで結構大変だった。

でもまあ、この仕事を始めて二年も経てば嫌でも覚えるもので、今では新しく入った子のフォロ

ーができるくらいにはなった。この仕事以外では役に立たないのが残念だ。

ヘアのトップをアメピンで留め、難なくセットを終えると、次はドレス選び。派遣されるお店の雰囲気にあったものをチョイスして、パーティションで区切られた更衣室で着替える。

私はまた今日の派遣先が決まっていないので、どんなお店にも合いそうなシンプルなものにした。通勤用のニットアンサンブルとツイードのタイトスカートと、爽やかなライトブルーのワンピースドレスに着替え、傍に立ってかけてあった姿見を覗く。ストラップに付いたコサージュと、ウエストのリボンベルトが可愛いそれは、つやつやしたサテンの肌触りが心地いいこともあり、選ぶことが多い。

「レイナさん。社長が呼んでますよ」

「わかった、ありがとう」

入れ違いに更衣室で顔を合わせたユリちゃんにお礼を言うと、今度は私が社長のもとへと向かう。

「レイナ、今日は『アンジュ』から指名が入ったから」

社長のデスクに行くと、彼は開口一番にそう言った。

「わかりました」

「伊織ママがいつも助かってるってさ。いい店だから大事にしるよ」

「はい、もちろん」

『アンジュ』からは週に一度は呼んでもらっている。一日ごとにお店が変わるのがスタッフ派遣のルールなのだけれど、店側は気に入った女の子を指名という形で再度呼ぶことができる。指名され

たスタッフには指名料が出るので、スタッフにとつても美味しい話なのだ。

『アンジュ』のママである伊織さんは私を気に入ってくれているらしい。よく指名をもらうので、お客様の中には私のことを本当に『アンジュ』の女の子だと思っている人もいるだろう。

もつとも派遣スタッフには、お店にいらつしやるお客様に自分が派遣であることを明かしてはいけないという規則があるから、そう思われて当然なのだけれども。

テーブルに戻ってユリちゃんと少し雑談を交わし、ふと腕時計を見ると長針が到着時からちょうどぐるりと一周したところだった。

私のシフトはいつも八時から十一時の三時間。そろそろ出勤の時間だ。

「もうそろそろ行くね。ユリちゃんはどうする？」

立ち上がりながら私が訊ねると、彼女も腕時計で時間を確認する。

「今日は歩いてすぐのお店なんで、あとちょっとだけ時間を潰してから行きます」

「そっか。じゃあお先に」

手を振る彼女と別れ、ハンカチなどの仕事道具が入ったポーチを手に事務所を出た。銀座という狭い範囲での移動とはいえ、余裕を持って行動するに越したことはない。

一週間の仕事疲れが垣間見えるサラリーマンや、ディナーデートに向かうカップルたちの横をすり抜け、キラキラとしたネオンに導かれるように『アンジュ』を屈指した。

「お疲れさまです」

「いらつしやい、レイナちゃん。待ってたわ」

『アンジュ』は高級ブランドショップが並ぶ並木通り沿いのビルの最上階にある。お店に着くと、薄暗い店内から歓談している声が聞こえてきた。

水商売は不景気の煽りを一番受けやすい業種で、最近では畳んでしまおうお店も少なくないのだけれど、この店は別。この不況の中でも客足はさほど衰えていない。

ただの一派遣スタッフとして働く私でもその理由はわかる気がする。純粹に、とてもいいお店なのだ。

黒服の男性は愛想がよく気も利くし、ギスギスしがちな女の子同士の関係も良好。何より、どんなときでも満面の笑みで迎えてくれる伊織ママを慕うお客様は多い。

女優風の艶やかな容姿もさることながら、魅力的なのはその人柄だ。お客様のほとんどは、伊織ママに会い、癒されるために、高額なセット料金を払って、ボトルを入れる。

銀座のママの中にはお客様のないところで、女の子に当たるような人もいる。派遣ともなれば特に苛立ちの捌け口になりがちなのだけれど、伊織ママはお店の子と派遣を差別することはなく——ううん、むしろお店の子以上に気を遣ってくれている。「今の席大丈夫だった？」とか、「嫌な思いはしなかった？」なんて訊いてくれる、本当に優しい人なのだ。

「今日も呼んでもらえて嬉しいです」

私がお礼を言うと、ママはえんじ色に蝶をあしらった品のいい着物の袖を少しくし上げ、指先を口元に添えながら、

「いえいえ。こちらこそいつも助かってるわ。本当、うちで働いてほしいくらいよ」

と冗談混じりに笑った。何回かそう言われたことがあるから、あなたが冗談でもないのかもしれない。

「で、早速なんだけどね、一番奥のテーブルについてもらっていいかしら？」

「はい」

私は快く頷き、そのまま彼女の示すテーブルに向かった。そのテーブルには、お客様二人に対して女の子も二人。ちょうどいい割合なのに私を足したということは、どちらかがじきに抜けてしまうのかもしれない。

「お話し中失礼致します」

会話の切れ目を見計らって、私はボックス席の端に、空いた丸椅子を引き寄せながら明るく声をかけた。

「はじめまして、レイナです。お邪魔してもよろしいでしょうか？」

「ああ、どうぞどうぞ」

ボックス席の奥で足を組んで座っていたほろ酔いの男性が、大きく私を手招いてくれる。年齢は四十代半ば、だろうか。わずかに白髪之交じた髪と、笑うと目元や口元に刻まれる皺しわを見て何となくそう思った。

「ワタナベさん、レイナちゃんもお酒をいただいても構いませんか？」

すかさず彼の隣に座る赤いドレスのお姐ねえさん——確か名前はミカさん、だったと思う——が、微

笑を添えて訊いてくれる。断られることはまずないので形式的なものだけれど、勝手にいただくわけにはいかない。

「もちろん。美人が増えると華やかでいいな、マサキ君」

「そうですね」

男性は快く頷き、対角線上に座る別の男性に呼びかけた。私もそちらに顔を向け——視線の先にいた彼の姿に釘付けになる。

こういうお店に来るにはかなり若い方なのではないかと思う。おそらく年は三十歳前後……どうだろう、もしかしたら私と同じ二十代半ばということもあるかもしれない。

落ち着いた声音のせいか、場の雰囲気には溶け込んでいるのだけれど、ここは会員制で、いわゆる一見さんお断りの高級クラブなので、彼のような若い人がやってくるのは珍しい。

「……レイナちゃん？」

「あ、ありがとうございます」

ほんのわずかな間だけれどマサキ君と呼ばれた彼から目を離せないでいた私は、彼の隣に座っていたピンクのロングドレスを身にまとったお姐さん——こちらは、サクラさん——から水割りの入ったレディースグラスを受け取った。

「じゃあすみません、もう一度乾杯させてくださいね」

グラスに両手を添えて少し掲げてみせると、四つのグラスも集まってきた、涼やかな音を立てる。私はグラスに口を付けながら、もう一度マサキさんを見た。

意思の強そうな直線的な眉をしているわりに柔和な眼差しが印象的な彼は、鼻筋のスツと通った彫りの深い顔立ち。なかなかの美形だ。主張しないスマートショート黒髪が爽やかで誠実な印象を抱かせる。

続いて首から下に視線を向ける。線は細めだがつしりしているとまではいかなければ、引きしまった身体をしているのはスーツの上からでもわかった。何かスポーツでもしているのかもしれない。

同じ会社に彼のような男性がいたら、さぞかし人気が出るのだろうなと思った。同時に、私が彼に想いを寄せる女性の一人になってもおかしくはないな、とも。

私生活で年の近い男性と接する機会が極端に少ない私は、そういう人と同じテーブルにつくだけで妙に意識してしまう。

「……レイナさんは」

視線を感じたのだろうか。マサキさんはグラスをテーブルに置いてから、私に向けて言った。

「名刺はお持ちじゃないのですか？」

ホステスに対しては丁寧すぎるくらいの口調。私が来る前にそういうやり取りがあったからだろう。

「ごめんなさい。レイナちゃんは、名刺を切らして居るんですよ。ね？」

私が口を開くよりも先にサクラさんが答え、私に目配せをする。

「はい、申し訳ありません」

彼女の言葉を受け、私はすまなそうに言ってみせた。

派遣スタッフがお客様に名刺を渡したり、逆にお客様から名刺をいただいたりするのは禁止されている。いらつしゃつたお客様はあくまでそのお店のおお客様であり、私個人の顧客にはいけない。そういうルールなのだ。

だから名刺について訊ねられたときは、入店したばかりでまだ作っていないと答えることになっている。ただ、私の場合は、よく『アンジュ』と呼ばれていて顔見知りのお客様もいるので辻褄が合わなくなってしまう。そこで、ママや黒服の人と相談してこのフレーズを使うようになった。

「そうなんですか。残念ですね」

「何だい。彼女が気に入ったのか、君は？」

奥の男性が茶化すと、マサキさんが照れたように小さく笑う。

「素敵だなあと思わせて」

社交辞令かもしれないけれど、素敵な人に「素敵」と褒められて、私の鼓動はほんの少し速まった。自分の単純さがおかしい。なんだかきまり悪くなって、誤魔化すみたいに水割りを飲み干す。

当たり障りのない会話を交わすうちに、ワタナベさんとマサキさんは直接のお友達ではなく、共通の人物を介した知り合いだということがわかった。

四十代のワタナベさんは会社を経営しているらしい。特別お酒が好きというわけではないようで、グラスの中身はさほど減らない。どうやらお酒を飲む空間に酔うタイプらしく、声高に笑いながらお姐さんの肩に触れたりして上機嫌だ。



対してマサキさんのグラスは、頻繁に注ぎ足されている。減りが早いわりに様子が変わらないところを見るとお酒に強いのだろう。かなり飲んでいるはずなのに、姿勢のいい座り方やグラスに添えた指先の所作が美しく、育ちの良さを感じた。

この仕事を始めてから気づいたのだけれど、お酒の嗜み方には普段の人間性が出るみたいだ。この店には滅茶苦茶な呑み方をするお客様はいらっしゃらないけれど、絡まれて困ることがないわけではない。接待する側の人間としては上品に呑んでくれるお客様を好んでしまうものだ。

そういう意味ではマサキさんは模範的なお客様なので、自然と彼への好感が増してしまふ。

「昔は何が何でも仕事が一番だったんだが、年を取るとそういうがむしやらかな部分がなくなつてダメだなあ」

時間の経過と共に顔の赤みが増したワタナベさんが、唐突にそんな言葉を口にした。

「やだあ、ワタナベさん、まだそんなお年じゃないでしょう？」

ミカさんが、赤いドレスの裾を引いて座りなおしながらクスクスと笑う。

「いやいや、若さつてのはな、生きていく上で一番重要だよ。女の子は特にそうじゃないのか？」

こういう話題は心臓に悪い。

女性というのは皆そうだけれど、特に水商売をしているお姐さん方は年齢の話に敏感だ。ほとんどの場合、稼げるのは若いときの一瞬。だから、お姐さん方はいかにして若いうちにお客様を多く獲得し、自分のお店を持つことに繋げるかというプランを立てている。年を取れば容姿でお客様を惹きつけることは難しくなるからだ。

私は二人のお姐さんの表情を盗み見たけれど、別段気にした様子はないようでホツとした。まあ、仕事でだし不機嫌な態度を見せるのはよろしくないということは、彼女たちも重々承知しているだろう。

「うふふ。確かに、若い女の子の方が好きだつて方も多いですけど、成熟した女性っていうのもいいものですよ？」

なんて、笑顔で切り返しているあたりはさすがといったところ。

「なるほどねえ。それなら君は、生きていく上で一番重要なモノつて何だと思う？」

ワタナベさんはグラスの水割りを舐めるように呑みながら、ミカさんにごく軽く問うた。

「んー、そうですねー。恋人がいるときは恋人、かなあ。私、いつまでも女性でいたいんで」

彼女は考える素振りを交えつつも、これ以外ないといった口調で答えた。なかなか情熱的で王道な回答だな、と思う。一見ありふれた回答の中にも、身にまとった赤い色のドレスに負けない、一途さみたいなものが垣間見えた。

「私だったら友達ですかね。恋人っていうのもいいけど、フラれちゃったら終わりだし。友達なら一生続くでしょう？」

続いてサクラさんも答える。これも鉄板な回答で納得する。

「君はどう？」

流れで、同じ質問が私にも回ってきた。

「……ええと」

お酒の席での他愛ない会話。真剣な回答を求められているわけでもないのだから、適当に答えておけばいい。でも変なところで真面目な私は、こういう場合、真剣に悩み、本気の答えを出してしまふ。

「……お金、かなあ、と」

正直に、常々、痛いほど感じていることを告げると、ワタナベさんは一瞬きよんとした顔をした。そして弾けるように「わはは」と大きく笑い出す。

「いいね、面白いよ、君。実に素直じゃないか。なあ、マサキ君」

ワタナベさんが楽しそうにマサキさんへと振ると、彼は無理に笑いを貼りつけたような顔で「ええ、まあ」と答えた。

瞬間的にまずいと感じ、お姐さんたちの顔を窺い見る。困ったような、呆れたような……微妙な表情だ。

自分がハズしてしまったことを知った私は、その発言を悔いた。確かに無粋な意見だったかもしれない。そういう率直さを出しても問題ないキャラクターの人が面白おかしく言えば、場が盛り上がったのかもしれないけれど、私みたいにヘルプ役の大人しいタイプの人間が言う台詞としては、直球すぎた。

幸い、ワタナベさんにはそれが笑いのネタになつたらしく、場の雰囲気の影響はなかつたけれど——マサキさんの反応はイマイチなように思えた。

こういうお店で働いていることもあつて、ガツガツしている女だと思われたかな、なんて落ち込

みかけたけれど、すぐに気にする必要はないと思い直した。

いくら滅多に現れないような若くてカッコいいお客様だからって、所詮私はただのヘルプ、彼はお店のお客様だ。ただそれだけの関係。印象を悪くしたのはそれなりに気になるけど、仮に悪い印象を与えたとしてもそれは私個人に対するものであつて、お店のイメージを壊すほどではないはず。私はそれ以降、極力余計なことを言わないように気を付け、聞き役に徹したのだった。

「本日はありがとうございました」

「下にタクシーを呼んでありますので、ご案内しますね」

ミカさんと伊織ママがそう言つて、クロークで保管している男性二人の鞆を取りに行く。お帰りの時間になつたのだ。

結局、私はずっとあのテーブルで接客をしていた。ともすれば場が白けかねない失態を犯したものの、お客様やお姐さんたちの機嫌は損なわなかつたようで一安心だ。

時刻を確認すると、ちょうど、夜の十一時を迎えようとしていた。ようやく胃が引き攣れそうな思いから解放される。

「レイナちゃん。こちらをお客様にお渡しして」

「はー」

あのあと、サクラさんのお客様がいらしたので、彼女が抜けて私がマサキさんの隣についた。黒革の鞆を伊織ママから預かり、持ち主である彼に向き直る。

座っているときはわからなかったけれど、こうして立った姿を見ると結構長身なんだな、と思う。  
「七五センチ、ひよっとしたら一八〇センチくらいあるのかもしれない。」

「……あの、お鞆、どうぞ」

「ありがとうございます」

私が失言したときの彼の微妙な笑みを思い出してしまう。

あのあと、彼からの視線を頻繁に感じるようになった。多分、私が「一番大切なのはお金」だなんて強欲なことを言ったからだだろう。それくらいしか理由が思いつかない。

私への印象が悪くなったのも構わないとは思ったものの……短い時間でも一緒にお酒を楽しんだ人に不快感を持たれるのは、やっぱりこたえる。

俯うつむきがちに鞆を差し出すと、彼は丁寧にお礼を言いながら片手で受け取った。

そして——もう片方の手で、たった今鞆から離れた私の指先を握る。

「……？」

まるで握手でもするような所作で手のひらに触れ、何かを押し込めるようにしてすぐに遠ざかる。残ったのは彼の手の温もりと、何か乾いた感触。

……これは、何？

困惑する私の耳元で、彼が静かに囁ささやいた。

「レイナさん、あなたと大事な話があった。ご迷惑でなければ連絡をください」

それだけ告げて、彼はパッと私の傍から離れた。おそらくミカさんやママの目を気にしたのだろ

う。私も慌てて彼女たちに目を向けたけれど、二人はワタナベさんと盛り上がっているようで、私たちが気にする素振りはない。

『ご迷惑でなければ連絡をください』

マサキさんが私に渡したものの……これって、もしかして。

私は自分の身体の陰で、そっと手の中のものを覗き込んだ。

小さく折りたたまれたメモ用紙を開くと、ゼロから始まる十一桁の番号が並んでいる。

……思ったとおり、携帯の番号だ。

「では、お見送りいたします」

ミカさんが二人を連れてエレベーターホールへ向かう。予想外の出来事に動揺しつつ、私も付いていこうとしたところで伊織ママに呼びとめられた。

「レイナちゃん、お見送りはいいわ。時間でしよう、帰って大丈夫よ」

「あ……すみません、それじゃそろそろ失礼しますね」

「お疲れさま。ありがとうございます」

ママは労ねぎいの言葉をかけてくれながら、にこりと微笑を浮かべた。そして、お客様の待つ他のテーブルへ向かおうとする。

「あ、あの」

ママを呼びとめると、彼女が不思議そうに振り返る。

用事は一つしかなかった。「先ほどのお客様からいただきました」と一言添えながら、このメモ

をママに渡すこと。

派遣スタッフには、お客様に名刺を渡してはいけないというのと同様に、お客様からいただいた名刺や連絡先などをお店に渡さなければならぬというルールもある。

このルールは徹底されていて、以前、酔ったスタッフがうっかり名刺を持ち帰ってしまったときには、三上社長から「次やったら除籍な」と厳しく言われていた。

だから、どんなに呑んでも、もらったものは絶対に渡してこよう——そう思っていた、はずだったのだけど。

「……………」

どうしてか、このメモをママに渡す踏ん切りがつかないでいる。

何故なのかは自分でもわからなかった。今までだつて名刺や連絡先を渡してくる男性はいた。でも、その都度ママに渡してきたというのに。

「レイナちゃん？」

「……あの、今のマサキさんって方、よくいらつしゃるんですか？」

間に合わせのように零れた言葉に、ママが首を振って答えた。

「いいえ、初めて見たわ。ワタナベさんのお知り合いってことでいらつしゃったのだけれど……それがどうかした？」

「い、いいえ。何だか、随分若い方だなと思ったので」

「そうよね。私も珍しいと思つたわ」

どうやらお店の常連ということではないみたいだった。

「……そうだ、レイナちゃん、やっぱりうちのお店に来るのって難しい？」

「え？」

ママが不意に真面目なトーンで切り出すものだから、私はきよんとしてしまった。

「前々から冗談めかして言っていたことなんだけど、『フェアア』を辞めてうちで働くっていうの、真剣に考えてもらえないかしら。レイナちゃんは真つ直ぐでいい子だし、気も利くし、お客様の評判もいいし……うちのお店にも合ってるんじゃないかなって思うのよ」

「……………」

「昼間は別のお仕事をしていて忙しいことも知ってるわ。でも、うちのお店にもそういう子はいやし、きっとレイナちゃんなら大丈夫だと思うの、だから」

「ママ、ごめんなさい」

私は彼女の言葉を遮るように言いながら、頭を下げた。

「このお店はすごく働きやすくて、私も大好きです。でも、派遣をやめてここで働くのは契約違反ですし……。それに、派遣で働く今のペースが私にはちょうどいい気がするんです。お気持ちは本当に嬉しいのですが、申し訳ありません」

お店側が派遣スタッフをスカウトするのは規則で禁止されている。許可してしまうと、派遣会社から仕事のできる女の子がどんどん引き抜かれていってしまうからだ。

もし見つかった場合、その店舗との契約を切るようなこともあるらしい。伊織ママは、そのリス

クを承知の上で声をかけてくれている。それは、とてもありがたいことなのだけど……

私がかもう一度頭を下げると、ママは残念そうにため息を吐いた。

「そう。そうよね。困らせちゃってごめんなさい。レイナちゃんの立場もあるでしょうし。でも、もし気が変わったらいつでも言ってみてね」

私はママの優しい微笑みに幾許かの後ろめたさを感じつつ、『アンジュ』をあとにした。

事務所に戻り、着替えと勤務報告を済ませ、駆け足で電車に飛び乗ったのは十一時三十分過ぎだった。

私の自宅は埼玉にあるから、事務所からの帰宅には地下鉄ではなくJRを使用する方がスムーズだ。銀座から程近い新橋駅のホームは、こんな時間にもかかわらず列ができるほど混雑していた。明日が休日という人が飲んでいて遅くなったのだろうか。

電車に乗ると、私はドアの横に寄りかかって大きく息を吐いた。

……今日もやつと終わった。解放感に浸りつつ、仕事せずと触れていなかった携帯電話を開く。新着メールが一通、不在着信が一件。いずれも大学時代の友人である香織<sup>かお</sup>からだ。

とりあえずメールの内容を確認してみる。

『やつほお☆ 前に話してた合コンだけど、やつば真帆<sup>まほ</sup>も来なよー。ていうか来てよー。至急連絡求む！』

前に話してた合コン……ああ、そういえば誘われて断ったんだっけ。

友人からの連絡とはいえ、仕事後の疲れもあり、私はゲンナリしていた。

香織は合コンや飲み会が大好きで、よく友人たちに召集をかけている……のはいいのだけど、今の私にそれに参加するような気力は湧いてこない。

顔を上げ、ドアの窓越しに流れていく街の灯りを眺めた。

今週は五回、この景色を見ている。誰かが褒めてくれるだなんて微塵<sup>みじん</sup>も思わないけれど、せめて自分がそうするくらいは許してほしい。

香織には『ごめんね、今気づいたんだけど、電車の中なの。四十分くらいかかっちゃうから、メールでもいい？』と送った。

連絡が来てから時間が経っているので、すぐには返事はこないだろうと思ったのだけれど、さすが『降りたらでいいから、電話待ってるよー』という答えが届いた。

……メールで済ませたい、と思っていたのは内緒だ。観念して従うことを決め、携帯を閉じた。

携帯——そうだ。

バッグから仕用のポーチを取り出し、小さく折りたたまれたメモ用紙を抜き出した。

広げて手ひらに収まるほど小さい無地のメモ。その中央に、二ヶ所をハイフンで区切った十一桁の数字が書かれている。携帯の番号に違いはない。

温かな感触と共にこのメモを渡してきた人物のことを思い出す。

——素敵な人だったな。容姿だけじゃない。穏やかで心地良い声音や丁寧な仕草、控え目な態度。

私にはその全てが輝いて見えた。

そんな彼が連絡先を渡すなんて……どこにでもいるような、ただのホステスの私に。  
「……………」

柄にもなく舞い上がっている自分に気づくと、自制の意味を込めて小さく首を振る。  
私ったら、何を勘違いしているんだらう。

考えるまでもなくわかることだ。きつと彼にとつては大したことじゃなく、ただ目の前に女性がいたから……反射的に渡したただけだ。そういう男性が存在するってことも、この仕事で学んだはずなのに。

ホステスとして働いていると、そんな誘いを受けることもある。残念なことに、強引だったりしつこかったりするお客様も多く、嫌な思いをすることも少なくない。

もちろん、そんなことが有り得るからこそその高額時給だつてことは理解しているつもりだ。でも……何となく彼はそういう人たちとは違うような気がしていたのだ。

「私ったら、バカみたい」

口の中で呟きながら、つくづくそう思った。

彼がどんな人かなんて、会ったばかりの私にわかるはずがない。

いくら男性に縁がないからつて、彼がカッコいい人だったからつて、恋愛をする余裕なんてないくせに。お店の常連客じゃないならいいかな……なんて、持ち帰つてきてしまったけれど、やっぱりママに渡してくるべきだった。

私は開いたメモをもう一度折りたたんで、ポーチの中に戻した。

家に帰ったら処分しよう——きつと、もう会うこともない人だから。

そう決心したとき、電車が自宅の最寄駅に到着した。このあたりはベッドタウンなので降りる人たちの数も多い。改札をくぐりながら、早速、香織に電話をかける。

「もしもしー？」

ワンコールのあと、香織のハキハキとした声が聞こえてきた。

「もしもし、香織。私だけど」

「真帆、今日はデートか何か？」

最初の連絡ですぐに応答しなかったからだろうか。香織はからかうように訊ねた。

「ううん、まさか。友達と呑んでただけ」

ダブルワークをしていることは誰にも教えていない。学生時代は、いわゆる真面目なタイプを貫いていたこともあり、銀座のクラブで働いていますとは何とも言いづらいのだ。

「あはは、そっかー、そうだよね」

「そうだよねってどういう意味よ？」

失礼だなあ、と口を尖らせつつ言うと、香織は悪びれずに続ける。

「だーつて、真帆つてばいつも忙しそうで、それどころじゃないって感じじゃん？」

彼女の言葉は正しい。でも、それを素直に認めてしまうのは面白くない。

「別にその気がないわけじゃないよ。今の職場に出会いがないっていうのもあるし」

「あー、派遣事務だつて。異様に女の人数ばかりだつていう」

「そうそう」

「だ・か・ら・さあ。ねっ、合コン、しょ？」

まさに絶好のタイミングとばかりに本題を切り出されたので、私は苦笑した。

「うーん……私はいいいよ。遠慮しとく」

「遠慮なんてしないでよー。真帆、氣い利くし優しいし可愛いからさあ、男の子ウケすつごくいいんだよね」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど……あんまり気が進まなくて」

「いいじゃない、合コンくらい。何もさ、会った人と絶対に連絡先を交換しなきゃいけないってワケじゃないし。軽くご飯食べて、適当に愛想振りまいて、ごちそうさまーって帰ってくればいいでしょ。運が良ければ、彼氏候補だつて見つかるんだから、ねっ、美味しい話じゃん？」

正直、そこに回せるエネルギーがあつたら、夜の仕事のために蓄えておきたい……と思うけれど、口に出せるはずもない。

「ごめん、香織。私、今はいいや」

「どうして？」

「どうしてって言われても……そこに割ける時間がないっていうか、割くつもりがないっていうか」

「……あのねえ真帆。あんた今いくつだと思ってるの？」

呆れたとばかりに、香織の声が一オクターブ下がった。

「わかつてる？ 私たちもう二十五なんだよ、もう最初の曲がり角通過しちゃったんだよ。今はい

いとか言ってる場合？」

「……そ、それは」

「同級生だつてそろそろ結婚し始めてるし、子供を産んでる子だつているんだよ。それなのに、彼氏の一人もいないって悠長すぎじゃない？」

「……」

「まさか一生一人でいるつもりじゃないでしょうね」

「そんなことは」

「淡泊にもほどがあるよ。そうじゃなくても、デートしたいとか、キスしたいとか、エッチしたいとか思わないものなの？」

まるでマシンガンを向けられている気分だ。香織の一言一言が弾丸となって私の胸を撃ち抜いていく。

「大体さ、大学三年のときの彼と別れて以来、真帆のそういう話って全然聞かないんだけど」

「……だつて、それ以来誰とも付き合っていないもん」

「ええっ、嘘でしょー？」

驚きというより悲鳴に近い叫びをもらに受け、私は思わず携帯を耳から離れた。

「香織、声大きいよ」

「だ、だつて、もう四年も経ってるのに？」

「うん」

「うん、じゃないって。ヤバイよ真帆、このままじゃ枯れちゃうよ」

もう枯れかけている、と言いかけてやめた。このままじゃ、香織の声はどんどん大きくなっていくばかりだ。

「この人いいなって人、本当にいないの？」

ふっと脳裏にマサキさんの姿が浮かんだけれど、慌ててそれを打ち消す。

「だから、出会いがないんだよね」

「出会い作ればいいじゃん、合コンで」

話が一周して戻ってきた。私は通話口を押さえ、香織に聞こえないようにため息を吐いた。

「……うーん、ごめん。やっぱりやめとくよ。今、本当に忙しくて、余裕ないんだ」

「真帆お〜」

「香織が好意で言ってくれてるのはわかるんだけど、今はどうしてもそういう気分になれないんだ。だから、他の子を当たってもらえるかな」

「……………」

「ごめんね」

私が本気で拒んでいることを察したららしい彼女は、勢い込んだ口調をリセットするように少し間をあける。

「まあ、本人にその気がないっていうなら、無理は言えないからさ。別にいいんだけど……」

「うん？」

「真帆さあ、いつも『忙しい、忙しい』って言ってるじゃない？」

「……………うん」

「でもさ、仕事って派遣事務でしょ。定時で上がれるだろうし、週休二日だって聞いてたし、何でそんなに忙しいんだろうって思ってる」

「……………」

「資格の勉強とかかなーって、皆で話してたんだ」

「……………うん、そんな感じ」

私が曖昧に肯定すると、香織はふうん、と頷いた。

「ま、それじゃ頑張ってるよ。気が変わったならまた連絡して」

「うん、ありがとう」

「それじゃあね。また落ち着いたらご飯でも行こうねー」

「はーい。おやすみなさい」

電話を切るころには、自宅のあるマンションの前だった。

駅から十五分、築二十年という部分に目を瞑れば、オートロック付きの小綺麗な建物で、ゆとりある3DK。住み心地は悪くない。

エントランスを抜けて真っ直ぐエレベーターまで進み、三階のボタンを押す。三〇二号室が我が家だ。なるべく音を立てないように気をつけながら鍵を開け中に入る。玄関のライトをつけ、パンプスを脱いで端に寄せた。



寝ている家族を起こさないよう、忍び足でダイニングに向かう。ストックキング越しのフロアリングが冷たい。

ダイニングの灯りをつけると、四人掛けのテーブルにぼつんと置かれた食事が目に入る。今日の夕食はハンバーグだったらしい。付け合わせの野菜と一緒にラップが被せてあり、「冷蔵庫にご飯があるから、一緒に温めて食べてね」と添え書きがあった。丸みのある、見慣れた母の字。

仕事中は、お酒は飲むけれど物を食べる機会はほとんどないので、いつもならこのタイミングでひっそり食事を取るのだけど、今日はそういう気分になれなかった。

私は食事を仕舞おうと、冷蔵庫の扉に手をかけた。

「あっ」

扉を開けた途端、うまく収納できていなかったらしいジャムや漬物の瓶が床に転がり落ちる。静かな室内で、ガタンゴトン、と派手な音を立てたので、私は焦って拾い上げた。

隣の部屋で眠っている二人を起こしてしまったのではないだろうか。瓶と食器を片付けてから、隣の部屋の扉をそっと開けた。

八畳の部屋の中央に蒲団が二組敷いてあり、よく似た顔の二人が横になっている。

片方には、暗がりの中でも目元に刻まれた皺の目立つ母が、そしてもう片方には妹の美帆がスースーと寝息を立てて眠っていた。

……よかった。熟睡してるみたいだ。

私はふと部屋の隅に置いてある美帆の学習机を見た。学校指定のバッグと一緒に、体操着袋と、

彼女がいつも使っているキャラクターもののバスケットシューズ入れが置いてある。

そうか、部活の日だったのか。この分だと今日はよほど動いたんだろう。

「日に焼けたくないから、体育館でやるバスケット部に入りたい」と話していたことを思い出し、そういうことを気にする年になったんだな、とおかしくなる。

私はそっと扉を閉め、自分の部屋に向かった。

中に入って荷物を置くと、ベッドの上で大の字になる。明日と明後日は休みだけど、家の仕事をこなさなくては。掃除や洗濯、買い物。やることは探せばいくらでもある。母の用事も聞いておかないと。

会話の空白を嫌い喉奥に流し込んだウイスキーのおかげで瞼が重くなる。

一週間、溜まりに溜まった疲れも手伝い、あつさり眠りへと誘われそうになった、そのとき。

『ヤバイよ真帆、このままじゃ枯れちゃうよ』

香織からの厳しい一言が頭を過り、私の意識はまどろみから引き戻された。

自分でも、ヤバイという自覚はあるのだ。だからこそ、他人に言われると不安になり、次第に恐ろしくなって考えること自体を放棄してしまう。

私——有村真帆は、そんな無限ループにハマり始めていた。

うちは女三人家族で、父親はいない。もともと両親が不仲だったこともあり、私が大学生のときに父が事業で失敗したのをきっかけに離婚した。今は連絡すら絶っている。

父は仕事しか頭がない人で、家族とコミュニケーションを取ることほとんどなく、酷い仕打ち

を受けたこともない代わりに、可愛がられた記憶もなかった。

母も仕事をしていただけで、忙しい中でもきちんと私と過ごす時間を取ってくれたので、おそらく父は私に興味がなかったのだろう。だから私も、父と離れ離れになると決まったときさえ取り立てて悲しいという気持ちにならなかった。

それよりも悲しかったのは母が事故に遭ったことだ。母は離婚直後に遭った交通事故で足を悪くして、外で働くことができない身体になってしまった。

キャリアウーマンだった彼女は、その事故により大好きだった仕事を辞めざるを得なくなった。日々の暮らしにも困るようになったけれど、父から受け取ったすずめの涙ほどの養育費と今までの蓄えを切り崩しながら、在宅ワークで私たちの生活を支えてくれた。

幸いにも私の学費は父が一括で納めておいてくれたので、大学を辞める事態にはならなかったけれど、私は家計の苦しさを十分に把握していたので、母の助けになればと時間の融通の利く近所のコンビニでアルバイトをした。

就職活動では正社員ではなく、派遣を希望した。特に優れた技術や能力があるわけでもない私は、高収入の職に就くことができない。それならば、派遣になって効率よく時間を使った方がいいと思っただけだ。

当然、友人は福利厚生もしっかりした正社員を希望する子が多く、「どうして最初から派遣に？」と言われたけれど、私は希望を変えなかった。理由があったからだ。

私には十二歳年の離れた妹、美帆がいる。美帆は母が離婚した当時まだ九歳——小学校三年生、

だったと思う。

母が職を失い生活が一変したということを理解していなかった美帆。まだ幼いだから、わかれと言う方が酷だ。私は、美帆に申し訳なく思っていた。

私はさほど苦勞せず、無条件に大学まで出してもらったのに、おそらくこのままいけば彼女の進学には制限が出てくるだろう。

同じ姉妹なのに、生まれたタイミングが遅いだけで選択が狭まるのは私も辛い。だから、最低でも高校、できれば大学まで美帆が行きたい方向に進めるように、他人より余計に働いてでもお金を稼がなければ……そう思うようになった。

私にホステスの仕事に向いているとは思わない。甘えるのは苦手だし、男性と付き合った経験も乏しい。幼稚園から高校まで女子高だったこともあり、男性というだけで構えてしまうというか、意識してしまうようなところがあったのだ。

最初は派遣事務の傍ら、バーでウェイトレスのような仕事をしていた。夜に働ける場所はお酒の絡むところが多いけれど、こういう仕事なら私にもやれそうな気がしたからだ。

けれど、仕事内容は問題なくても、収入は思うようになかった。終電ギリギリまで働いても、週に何回シフトに入っても時給は変わらない。何かもつと条件のいい仕事はないかと探していたところで、同じバイト先の女の子に紹介してもらったのが『フェア』だった。

話を聞いたときは、銀座で夜の蝶なんて絶対に無理だと思った。けれどお給料が魅力的だったのでダメ元で面接に行ってみたところ、ちょうどスタツプが足りない時期だったらしく、

「君、いいねー。品がいいし、笑顔もいい。きつと銀座でウケるよ！」  
なんて言われてあつという間に採用が決まり、気がついたら二年。

今日みたいに失敗したり、ちょっと嫌なお客様に絡まれたりして辞めたくなるときもあるけれど、いくつかのお店で指名をもらえて、どうにか働いている。

「このままじゃ枯れちゃうよ、か……」

香織の言葉をもう一度口にして、ごろりと寝返りをうった。

もちろん、男の人に興味がなわけじゃない。素敵な人がいたらお近づきになりたいし、いいお付き合いができたらな、と……人並みの感覚は持っているつもりだ。

でもどうしようもない。昼間は事務、夜はホステス、休日は家のこと。それらをこなすのに一杯で、自分のことは後回しになってしまう。

母は足を傷めて、日常の生活にも支障をきたしている。買い物や洗濯、そして掃除も、身体に負担がかかるところは私の仕事だ。

美帆も手伝おうとしてくれるけれど、学生時代は一度しかない。家のことよりも、彼女には勉強や遊びを頑張らせてほしい。

『同級生だつてそろそろ結婚し始めてるし、子供を産んでる子だつているんだよ。それなのに、彼の一人もいないって悠長すぎじゃない？』

『まさか一生一人でいるつもりじゃないでしょうね』

香織の声がリフレインする。私はもう一度寝返りをうった。

……わかつてる。そろそろ、自分のことも考えなくちゃいけないって。

大学を卒業し、ダブルワークを続けて三年。日々の忙しさにかまけて、気になる男性どころか、友人関係も徐々に希薄になってきている。

『有村さん、やっぱり帰っちゃったんだー。相変わらず付き合い悪いよね』

今日も帰りに言われてしまったんだつた。しょうがない、本当のことだから。

私の職場はほとんどが女性で、比較的正社員と派遣社員の仲もいい。

だから、金曜日に皆で飲みに行くなんてこともザラにあるのだけれど、終業時間を迎えても私には次の仕事があるから、その誘いに応じたことは一度もない。

もちろん、参加したくないわけじゃない。お酒を飲んだり会話を楽しんだりするのは好きだし、職場の人もいい人が多い。

だけど、今、仕事を減らすわけにはいかないのだ。

そんな付き合いの悪い私に懲りずに構ってくれる香織はありがたい存在だけれど、彼女もそのうち離れていってしまうかもしれない。このままだと本当に独りになってしまっくんじゃないだろうか。

……たまに、同年代の友人が羨ましいと思うことがある。

オシャレに時間をかけたり、オールで盛り上がったたり、彼氏とデートしたり、趣味に熱中したり、習い事したり。やってみたいことは幾らでもある。

でも、私が今、一番やらなければいけないことは、家族を守ることだ。

脳裏に母と妹の顔が浮かんだ。心配をかけたくなくて、二人にもダブルワークのことは秘密にし

ている。

残業があるという私の嘘を信じ、遅く帰ってきてでも必ず食事を用意しておいてくれる優しい母。運動が好きだから、とスポーツ推進校の私立に興味を示している中学一年生の妹。

母を助きたい。妹に苦勞をさせたくない。その思いだけが、今の私を支え、動かしている。

せめて美帆が高校を卒業するまではできる限り頑張らないと。

私自身のことはそのあとでいい。

『……あのねえ真帆。あんた今いくつだと思ってるの？』

そう思ったとき、香織の呆れた声が聞こえた気がした。

私は今、二十五歳。美帆が高校を卒業する年には……三十歳、いや、三十一歳になる。

改めて認識すると結構、ううん、かなりシヨックだった。

三十一。確かに、最近では婚期が両極化していて晩婚の人たちも珍しくないけれど……その年から相手を探して、間に合うのだろうか。

ただでさえ私の環境は出会いが少ないし、年齢を重ねれば重ねるほど女性は不利になる。香織の言うとおり悠長にしている場合ではないんじゃないだろうか。

急に深刻に思えてきた私は、盛大にため息を吐いた。

なるべく考えないようにしよう。そう思っていたのに……一度心に留まってしまうと、それが焦燥感となって重くのしかかる。

——ふと、マサキさんのことを思い出した。

彼はどういふつもりで連絡先をくれたのだろう。お金が一番大事だなんて、まるで守銭奴みたいな卑しいことを口走ってしまった私に。

「何となく、に決まってるじゃない」

自惚れないでよ、と自分に言い聞かせる。きつと気まぐれだろう。あれほどの人が私に声をかけるなんて、それ以外考えられない。

あ、でもそういえば……

『レイナさん、あなたと大事な話がしたい。ご迷惑でなければ連絡をください』

私の記憶が合っていれば、たしか彼はこんなことを口にしていた。

大事な話——それを、会ったばかりの私に？

私の頭の中は疑問符でいっぱいになる。何故彼はそんな風に……

ナンパの手口だったとか？

でもそうだとしたら、こんな大げさな理由は必要ないはずだ。ただ単に、番号を渡すだけで済む……妙に、引つかかる。

いずれにしろ真意はマサキさん本人しか知り得ないのだけど。

「……………」

それなら、いつそ訊いてしまおうか。なんて気持ちも頭をもたげる。

わざわざ向こうから番号を差し出したのだから、かけて迷惑ということはないだろうし、その大事な話とやらだけ聞いて電話を切れればいい。そうしたら、もう彼のことを考える必要はない。

大体、これが本当に彼の携帯番号なのか……もつといえ、実際に存在する番号であるのか、それさえ定かじやない。確かめるには、やっぱり行動を起こしてみるしかないのだ。

我ながら強引な理論だなども思っただけれど、あえて無視を決め込んだ。

ベッドから起き上がり、通勤バッグの中から仕事用のポーチを取り出す。その中から、先ほど仕舞いこんだメモ用紙を引っぱり出すと、十一桁の番号を携帯電話に打ち込んだ。

時刻は深夜の一時過ぎ。非常識な時間帯かとも思っただけれど、この勢いを借りなければ行動を起こそうにない。明日は多分休日だし、とか、私がホステスだと知っているんだから電話をかけるとしたらこの時間になってしまうのは承知の上だろう、とか自分に言い訳をする。

全ての数字を打ち終えると、私はベッドを椅子代わりにしながら、メモを傍らに置いて左胸を手で押さえた。次第に鼓動が速まっていく。

お店に黙ってお客様に連絡をしているという背徳感からなのか、ただ単に好みの男性と接触しようとしているからなのか、もしくははその両方なのか。

意を決して通話のボタンを押した。電子的な呼び出し音がさらに緊張を高めていく。

もう寝てしまったのかなと諦めかけたところで、急にプツツと何かが途切れる音がして、

「もしもし」

……と、つい数時間前に聞いたのと同じ、優しげで落ち着いた声音が届いた。マサキさんだ。

「あ、あの……もしもし」

情けないことに、私の声は震えていた。これではいけない、と一呼吸置いてから、

「こんな時間に申し訳ありません。私、先ほど『アンジュ』でご一緒させていただいた、レイナです」  
はつきりとした口調でそう告げる。

「ああ、レイナさんですね。いいえ、大丈夫ですよ。お電話をいただけで嬉しいですよ」

マサキさんは私だとわかると、少し安堵したようなニュアンスを織り交ぜ、お店のときと変わらぬ言葉遣いで続けた。

「もうお仕事は終わりましたか？」

「はい、ですのでお電話いたしました——こんな時間ですので、失礼かな、とは思ったんですが」  
努めて冷静であろうとするものの、電話の向こうに彼がいると思うと肩に力が入って、さっきと同じようなフレーズを言い訳がましく口にしてしまう。

「いいえ、早くご連絡いただけで助かります。お店の手前、あのような方法しかなかったもので、不審がられないか気を揉んでいましたよ」

冗談っぽく笑いながら彼が言った。あのような……というのは隠れて番号を渡したことだろう。

早速、「大事な話」について訊きたいけれど、こういうのってどう切りだしたらいいんだろう。「大事な話って何ですか？」なんて、単刀直入に訊くのは失礼だろうか。

ほんの一分前まではズバリ訊いてしまう気満々だったけれど、いざこうして彼とコンタクトを取ってみると、弱気になってブレーキがかかってしまう。

「レイナさん。お電話をくださったということは、僕の話に耳を貸してください、ということですよ。よろしいですね？」

私の気持ちを察してくれたのだろうか。マサキさんの方から話をふつてくれる。

「は、はい。お話があるとのことだったの……」

「ありがとうございます。……ただですね、お電話で伝えるのは少々難しい、デリケートな話なんです」

「え？」

「ですから、後日改めて、ゆっくりお話をする機会をいただければと思っています。いかがでしょうか？」

想定外の事態に、私は言葉に詰まった。これって、つまりどういうことだろう。

ナンパにしては回りくどい言い方だ。かといってただのホステスと客が日を改めて慎重にする話なんてあるのだろうか……？

「ええと、あの……」

「すみません、いきなりそんなことを言われても困りますよね。怪しいと思われるのも当然ですが、あまり警戒しないでいただきたいのです」

彼自身、自分の言っていることが不自然であることを理解している。そんな言い方だった。

「とにかく、あなたと一度ゆっくり話をしたい。ご迷惑でなければ、是非」

「……………」

「レイナさん？」

私は揺れていた。これが警戒するべき状況であるのはわかっている。どう考えても釈然としない

話だ。うっかり誘いに乗れば変なことに巻き込まれ、厄介な目に遭う可能性だってある。

けど——自分でも不思議だった。今は、疑わしい気持ち以上に、彼の話を聞いてみたい。聞くだけならいいじゃない、という気持ちが勝っている。

いい年をして恥ずかしいけれど、この展開に何か運命的なものを感じていたのかもしれない。

「……わかりました。あなたを信じます」

まるで見えない糸に引き寄せられるようにそう答えていた。

「ありがとうございます、レイナさん。本当に、ありがとうございます」

彼は電話越しに頭でも下げているのではないかと思うくらいに丁寧なお礼を言ってから、早速日取りの相談に入った。

まさかその先に、好奇心では片付けられない一大事が待っているようなんで、思ってもみなかったのだけけれど——

マサキさんとの約束は一週間後、土曜の午後二時。

待ち合わせ場所として指定されたのは東京駅のすぐ傍にある、最近できたばかりの真新しいホテル。そのロビーだった。

オープンしたときに話題になっていたので名前こそ知っていたものの、自分の生活には係わりのない場所だという認識があり、足を運ぶのはおろかホテルの入り口に立つのも初めてだった。

ロビーは二十八階で、バーラウンジに直結しているらしい。天井に小さいながらも精緻なシャンデリアが吊られたエレベーターで上昇すると、扉が開いてすぐのソファにマサキさんは座っていた。慣れない場所だから時間がかかってしまうかとも思い、余裕を持ってやってきた私より、ずっと前に来ていたことになる。

マサキさんは私が現れたことを知るとすぐに立ち上がり、深々と礼をしてから、爽やかな笑顔で口を開いた。

「先日はどうも。よくいらしてくださいましたね」

「お……お久しぶり、です」

笑顔を返したつもりだけど、緊張からくる顔の強張りこわばりは隠せていないだろう。

彼の装いはスリムなブラックのスーツに、ブルー系のシャツとネクタイ。先日もそうだったけれど、知的な印象でよく似合っている。

「素敵なワンピースをお召しですね」

彼も私の服装に注目していたようで、温かみのある笑みを湛たえたまま、そう言ってくれた。

「……ありがとうございます」

ストレートに褒められた気恥かしさから、ついつい俯うつむいてしまう。

こんなかしこまったところに来る機会なんてないから、クローゼットの中身をひっくり返す勢いで服を選んだ。可愛い服にするべきか、大人っぽい服にするべきか、定番モノか、トレンドか……色々悩んだ末に、以前アウトレットで購入したグレーのバーバリーチェック柄のミニワンピースにした。落ち着いているけれど可愛い印象もあるし、身体のラインが綺麗に出る。私の持っている数少ないハイブランドのものだ。

「それでは、部屋の方に参加しましょうか」

「え？」

さも当たり前のように切り出されて、私は耳を疑った。てっきり目の前のラウンジに入るものと思っ込んでいたからだ。

「部屋……それって……？」

「三十六階に部屋を取っています。チェックインは済ませてありますので、早速参りましょう」

「あの、待ってください」

私は不躰にならぬ程度に強く言った。たつた今背中を見せた彼が再び私に向き直る。

「その、さすがにまだそういうのは早い……んじやないでしょうか……?」

もしかしてこれが彼のやり方なんだろうか。誘えばすぐに乗ってくる女だと思われるのだとしたら心外だ。そんな軽率な関係を望んではない。

……正直に言うと、彼に興味がないわけではないけれど、そういう目的であれば引き返すつもりで抗ってみる。

疑う私の一、二メートル先で、彼は柔らかに微笑んでいた表情をきりりと引き締める。私がつめらう様子を見せたことで合点がいったようだ。

「……ああ、これは失礼致しました。そういう誤解をされても仕方がない状況ですよ。でもご安心ください。あなたに無礼な振舞いは何一つしないと誓います」

彼はそう言うと、再び私に背を向け、ロビーのデスクへと足を進めた。

「……あ」

返答するきっかけを失い、呼びとめるべく前へ出した手が空しく宙を掻く。

知らないも同然の彼にこのまま付いていくべきではないのかもしれないけれど、彼の態度から下心は感じられなかった。

むしろ、私への対応は大切な客人をもてなす感じに近く、それが私の疑念を取り払ったのだった。彼はデスクでベルボーイと二言三言交わしたあと、私の荷物を持つてくれ、まるで彼自身がベルボーイであるかのような所作で、私を部屋まで連れていってくれる。

「さあ、お入りください」

豪壮なエレベーターホールを抜けると、マサキさんは私のために扉を開けて、中に入るように促した。

部屋に一歩足を踏み入れると、いつもより高めのヒールが、良質で柔らかい絨毯に優しく受け止められた。そして、何とも言えない上品な香りが鼻を擽る。

「こちらにおかけください」

扉のすぐ傍には四人掛けのテーブルセットがあり、脇にはワゴンがとめてある。その奥には東京の中心地を見下ろせる大きな窓と、L字型をした革張りのソファが見えた。壁や飾り棚には名作の複製と思われる水墨画や、オリエンタルテイストの間接照明などのインテリアが並ぶ。マサキさんは恭しく私をテーブルの方へ促した。

「は、はい。失礼します」

私はぺこりと頭を下げると、着ていた黒いジャケットを脱いで椅子に腰かける。ベルベットの肌触りが心地いい。私が座るのを見届けてから、彼も向かいに腰を下ろした。

「わ、ここにもシャンデリア……!」

頭上を仰いで思わず声を上げる。

「そうです。このホテルの象徴だそうです。ロビーやエレベーターの中でもご覧になったでしょう?」

「はい。何だか豪華で恐縮しちゃいますね」

素直に答えると、彼は小さく笑った。



このホテルはとにかくあらゆる場所にシャンデリアが吊られ、輝きを放っている。私の視線の先でも、丸いフォルムのモダンなシャンデリアが堂々とその存在を主張していた。

まるでクリスタルでできたドーナツが浮かんでいるような……なんていう表現しか浮かんでこない自分が情けない。

圧倒されながらも私は改めて室内を見渡した。とにかく広い。こんなに広いゲストルームを初めて見た。何しろリビングルームだけでも一部屋分の広さだ。

ふと、これと全く同じ風景をインターネットで見たことを思い出す。

……そうだ、間違いない。スイートルーム！

そう気がついたとき、私の背中にヒヤリと冷たいものが走った。

きつと奥の方を覗けば、これまた立派なベッドルームがあるのだろうけれど、私は突如押し寄せてきた緊張のせいで、そこを覗きに行く気分にはなれなかった。

ただでさえ、こんな非日常な状況でドキドキしているのに……心臓が悪い！

「そういえば昼食はお済みですか。もしよろしければ何か召し上がりませんか？」

彼は思い出したように私に訊ね、白い冊子のようなものを差し出した。おそらくルームサービスのメニューだろう。

「このアフタヌーンティーは女性に人気なので、ぜひお勧めしたかったのですが、部屋には運べないそうなんです。ですが、もし甘いものが好きでしたら、ケーキなどもルームサービスで選べるようですよ」

「お、お気遣いありがとうございます。でも、大丈夫です。済ませてきましたので」

本当のところ、胃はからっぽだったけれど、気を張り詰めているせいか食欲が全く湧かない。彼の厚意は受け取りつつ、私は小さく首を振った。

「そうですか、わかりました。では飲み物だけでも——」

「……あの、マサキさん」

「何でしょう？」

慣れない空間にいる居心地の悪さもあり、私はついに痺れを切らした。

「そろそろ教えていただけませんか。わざわざこんな場所にお呼びになって、一体私にどんなご用があるというんですか？」

私は彼の真意を探るように、マサキさんの双眸を見据えた。

約束の段階からわからないことばかりだった。マサキさんの言う「大事な話」って、本当に存在するのだろうか。やはり女性に声をかけるための口実なんじゃないだろうか？

でも口実だったとしても、クラブで出会ったホステスを口説くためだけに、こんなに豪華な部屋を使ったりするものだろうか？

私がこのスイートに泊まろうと思ったら、昼間の仕事の一ヶ月分のお給料が飛んでしまう。そんな特別な部屋をサラッと押さえることができるなんて、マサキさんは一体何者なのだろうか？

疑問が頭の中でぐるぐる渦を巻き、私の唇から零れる。マサキさんは冊子を片付けると椅子から立ち上がり、スーツの内ポケットに手を入れた。

「質問に答える前に、自己紹介をさせてください。……僕はこういう者です」

彼はスタイリッシュなシルバーの名刺入れから中身を一枚取り出すと、私に差し出した。慌てて立ち上がり、それを受け取る。そこには、「白石正紀しろししまさき」という彼のフルネームが記載されていた。

「マサキさんって、ファーストネームだったんですね」

てっきり名字だと思っていた。

「はい。先日一緒に呑んでいたのは、父の昔からの友人だったんです」

彼は頷いて言った。なるほど、それなら親しい呼び方も頷ける。

私はもう一度名刺に目を通した。

「株式会社ブルームラボトリー、マーケティング部……」

一度も耳にしたことがない社名。声に出してみてもそれは変わらなかった。

けれど、名刺の下部に『イノセントパール』というロゴを見つけて、私はあっ、と小さく叫んだ。

『『イノセントパール』って……もしかして、エステの？』

「ご存知ですか？」

「はい、雑誌の広告で拝見しました。利用したことはないんですけど」

確か、二十代前半のカリスマモデルがイメージキャラクターとして起用されているはずだ。ここ何年かの間に看板を見かける機会が多くなった。

答えてから、よもやと思い顔を上げる。

「もしかしてエステの勧誘ですか？」

私が訊ねると、マサキさん——改め正紀さんは虚を衝かれたような顔をし、それから笑いながら首を横に振った。

「いいえ、ご安心ください。そんなことよりもずっと重要な話ですよ」

そんなことは考えもしなかったという反応だった。……何かおかしなことを言ってしまったのだろうか。

「よろしければ、レイナさんの名刺もいただけませんか。先日はタイミングが悪かったようなので」

「……その、今日も名刺は持ち合わせていなくて」

「よほど人気があるんですね。発注が追いつかないんですか？」

「いいえ、まさかそんな」

正紀さんが目を丸くして驚いたので、私は誤解されないよう、すかさず首を振った。

……私があのお店の人間ではないことを告げても、問題ないだろうか。少し迷ったものの、もう誤魔化す必要はないように感じられて真実を告げた。

「それじゃ、レイナさんはあのお店に派遣されてきていたということですか？」

「はい。いつもじゃないんですけど。たまに呼んでいただいています」

「そうですか。そういうことだったんですね」

そう言いながら、彼は嬉しそうにしている。理由がわからなかったので訊ねてみる。

「僕は本当にラッキーだったということですよ。神様なんて信じてはいませんが、今だけは感謝したい気分です」

私には彼が何に感激しているのかちっとも理解できなかった。

そして、正紀さんはちよっと焦ったように左の首首を見る。視線の先にはブルガリの腕時計が光っていた。

「……すみません、本当は三人揃ってから話をしようと思っていたのですが、仕事で遅れているようです」

「三人？ 正紀さん以外に誰かいらっしゃるんですか？」

「はい。でも時間をもつたいないですね。それではまず、僕だけで——」

彼が言いかけたとき、ノックが聞こえた。同時に、正紀さんの表情が安堵で緩む。

「到着したようです。今、通しますので少々お待ちください」

「はじめまして、お待たせして大変申し訳ありません」

扉の向こうから現れたのは、ダークブラウンのストライプスーツにモスグリーン地のネクタイを身に付けた、やや肌の浅黒い男性。黒髪はきっちりオールバックにセットされている。よく通る低音が、私に謝意を伝えた。

「い、いえ」

私が首を横に振ると、彼は私と正紀さんの間に座った。

「僕はもうご挨拶をしてみましたから、タツヤさんもお願ひします」

「わかった」

正紀さんに促され、タツヤさんと呼ばれたその人は正紀さんと同じように名刺を差し出した。

「大和田と申します。本日はご足労いただきましてまことにありがとうございます」

名刺には、「大和田達哉」と書かれていた。正紀さんと同じ、株式会社ブルームラボラトリーに勤めていて——

「取締役……」

名刺に書かれた役職名を読み上げ、私は目を瞠った。そして顔を上げる。

正紀さんと同じか少し上くらい……多分、まだ三十代半ばぐらいの彼だけれど、中堅の映画俳優みたいなどつしりと構えた雰囲気、積み重ねてきたのであろうキャリアを表わしているように思えた。

大和田さんがじっと私を見つめる。その瞳が、言外に私の番だと訴えているようで……。そこで初めて自分が名乗りすらしていないということに気づく。

「す、すみません。私、ちゃんとご挨拶もせずに」

すると正紀さんが人のよさそうな笑顔で首を振った。

「いえ、いいんですよ、レイナさん。あなたは僕たちの話を聞いてくだされば。まず僕たちの話を聞いて、その上で僕たちに協力してくださいる気持ちになったなら……そのときに、あなたのことを色々と教えてください」

「……協力？」

「はい。その代わり、話を聞いて協力できないと判断されたときは、今日耳にしたことは全て忘れ

てほしいんです」

「えっ……?」

「電話でもお伝えしたとおり、とてもデリケートで重要な話なんです。第三者には絶対に漏らしたくない。こうして部屋を取ったのはそういう意味合いがあるんですよ。ですから、約束してくださいますか。決して他言しない」と

正紀さんの柔和な眼差しが、鋭いものになる。元より誰かに言いふらすつもりなどなかった私は、素直に頷いた。

「わかりました」

「ご理解いただきましてありがとうございます」

私が頷くと、正紀さんの瞳にまた優しさがともった。

「そうだ、話の前に乾杯をしましょう」

正紀さんは立ち上がり、テーブル脇のワゴンに近寄った。ワインクーラーに刺さっていたシャンパンを取り、三つのグラスにそれぞれサーブする。

「よく冷えていると思います。どうぞ」

正紀さんからグラスを受け取り、胸の前に引き寄せる。琥珀色をした液体の中では小さな気泡が曲線を描き、芳しい果実の香りが立ち上った。

「——それでは、素敵なお出合いに」

彼はグラスを小さく掲げて言った。私もそれに倣ってからグラスを唇に寄せる。

「……美味しい」

「お気に召しましたか?」

「もちろん——こんなに美味しいお酒、初めていただきました」

嘘じゃなかった。ワインの種類には明るくない私だけど、これがとても高価なものであることはすぐに理解できた。これまで呑んできたものとは明らかに一線を画している。

「良かった。こういうの、お仕事でよく召し上がっているだろうと思いましたが、今日は特にいいものをセレクトしてもらったんです」

「とんでもない、私はただのヘルプですから。こんな贅沢をさせていただいて申し訳ないくらいです」  
正紀さんとそんなやり取りを交わしていると、視線を感じた。隣を見ると、大和田さんがじっと私を見つめている。

まるで値踏みをするような厳しい目に、背筋が冷たくなるような心地がした。

「今日は僕たちにとって大切な日——そう、いわば勝負の日なんです。だから、何一つ妥協はしたくない。出し惜しみをしたくないのです」

だから部屋にもお酒にもお金を惜しまない……そういう意味なのだろうか。

正紀さんは至って朗らかにそう言ったけれど、その言葉に揺るぎない意志が宿っているのがわかる。

彼らの様子を見ると、大和田さんにとっても正紀さんにとっても、今日のこの出来事は、今後の二人に多大な影響を与えることなのだ意識せざるを得なかった。

少しの間シャンパンの味を楽しんだあと、男性二人はどちらからも顔を見合わせ、視線だけで会話をした。そして、大和田さんがゆっくりと頭を揺らす。

「どうやら、この場の主導権は大和田さんに渡ったようだ。」

彼は咳払いを一つしてから、口を開いた。

「本題に入りましょう……レイナさん、でしたね。あなたは我々の会社をご存知ですか？」

「はい。……エステサロンを経営されているんですね」

「そうです。我がブルームラボラトリー社が経営するサロン『イノセントパール』は女性向けのリラクゼーションやエステを中心としたサービスを展開しています。コンセプトは『無垢な真珠』。それぞれの女性が持つ純粋な美しさを磨くお手伝いができるようにと、サロン名に反映しました」

先ほどの冷ややかな眼差しが一転し、大和田さんはニューズ番組のメインキャスターのように丁寧かつ流暢に話し出す。

「現在の社長が一代で築き上げた会社ですが、CMやキャンペーンなどの効果もあり、社会的にはずっと上り調子をキープしています——ま、詳細な企業説明は不要でしょうかね。重要なのはここからです」

大和田さんはちらりと正紀さんを見た。正紀さんが長い睫毛を伏せて続きを促すように頷く。

「実は、その社長が病に倒れたのです。おそらく役職復帰は絶望的……いや、それどころか意識が戻る見込みもないでしょう」

いわゆる、危篤状態ですと付け足して、大和田さんが続けた。

「社長はかねてより新しい運営プランの実行を宣言していました。その中で社長が最も重要視していたのは広告宣伝の効率化です。現在の広告宣伝効果はあまり高いとは言えません。何故なら、この企業も似たり寄ったりだからです。どういものか見当が付きますか？」

街で見かける大手エステサロンの広告や、CMを思い浮かべた。どこも旬のモデルや女優を起用して、そのスレンダーな身体美を強調する作りになっている。私は静かに頷いた。

「そう。表現は多少違っても、メディア露出の多いタレントを使って会社の知名度を上げようとするのは同じです。社長は常に先の先を見据えているような人でした。そういったありふれた広告パターンが通用しなくなるという事に気がついていました。元より根強い人気や認知度を誇る大手ならまだしも、我々のような新興の会社ではインパクトに欠ける」

「そこまで言うと、大和田さんはシャンパングラスの中身を一口含み、口内の渴きを潤してからさらに続けた。

「我々のような、まだ十分に知られていないとは言えない企業が名を広めるには世間にインパクトを与えることが重要です。そこで社長は考えた。社長自身が広告塔になれば話題になり、マスメディアや消費者も食いつくだろう、と」

「社長自身が広告塔に……つまり、社長がタレントの役割を担うということですか？」

「はい。最初から洗練されているタレントを使うのではなく、より消費者に近い一般の女性を社長として迎え、広報の役割を果たしてもらおう。そうすることで消費者は親近感を持ち、マスメディアは物珍しさから取り上げるようになる。我がサロンのシステムや技術は大手にもひけをとりません。」

注目さえ得られれば売上は伸びる——つまり、何を申し上げたいのかと言いますと」

大和田さんの眼光がより鋭く、真剣なものに変わる。射るように私の双眸を見つめながら、突拍子もないことを口にした。

「レイナさん、あなたを……我が社の次期社長としてお迎えしたい。そう思っています」

大和田さんが何を言っているのか、すぐにはわからなかった。

彼の台詞を何度も反芻し、時間をかけ、やっと……その意味を理解する。

「!?」

私は声にならない声を上げた。

「あ、あの、すみません、お話の内容は、把握できたかと思うのですが……でもその、何をおっしゃっているかよくわからないというか……」

矛盾しているように聞こえてしまうかもしれないけれど、私は思っただまを言った。

私を社長にするって、どういうこと!?

だって、私はたった一度正紀さんに会っただけの人間なのだ。大和田さんに至っては今日初めて顔を合わせたし、どちらにも本名さえ名乗っていない程度の仲だ。そんなどこの誰とも知らない女に、いきなり「社長になってくれ」だなんて——正気の沙汰とは思えない。

「突然のことで混乱されるお気持ちはわかります。ですが、我々は本気です」

大和田さんは涼しい顔でシャンパンを飲んでいる。酔いが回って適当なことを言っているのではないかという気持ちがほんの少し過ったけれど、そういうことではなさそうだ。

「ほ、本気と言われましても……」

目が飛び出るくらいに驚くことがあると、人ってただひたすらにうるたえてしまうのだな、と頭の片隅で思った。

訊きたいことや言いたいことは山ほどあるのに、あまりの衝撃からか、まるで脳から声帯にかけての伝達が遮断されてしまったみたいに、空気が漏れるような音しか出てこない。

「レイナさん。どうか落ち着いてください」

そんな私を宥めるように正紀さんが声をかけてくれる。

「驚くのも無理はありません。きつと僕があなたの立場でも同じように思ったでしょう。でも、彼も言ったとおり僕たちは本気です。父はもう長くない。社長不在の期間は可能な限り短くしたいのです」

「……父って」

もしかや、と思う。彼は痛みを堪えるような表情で頷いた。

「はい。……現社長の白石正裕は僕の実父です。僕は会社の一社員に過ぎませんが、『イノセントパール』は父が人生を捧げて育ててきた子供のようなもの、いわば僕の兄弟です。僕は僕の立場で、父の思い描いていたプランを実現させたい。そのためにはどうしてもあなたの力が必要なんです」  
眉根を寄せる正紀さんの手元を見た。シャンパングラスのステムを支える指先が白くなっている。これは冗談でも何でもなく、彼の心からの言葉であることが伝わってきた。

「……どうして、なんです」

やつこのことで言葉を紡ぐ。取っ掛かりさえ上手く吐き出すことができれば、あとはスムーズに声になった。

「どうして、私なんですか。あなたは私のことを知らない。私がどんな人間で、普段どんな風生活をしているのか、どういう立場の人間なのかも全部。それなのに、いきなり会社の社長になれだなんて……どう考えても不自然です」

彼が私をからかっているのだから、それなら私に話せばいい。私に話せばいい。

私が向けた問いに、彼は淀みなく言葉を返す。

「現社長は企業イメージを特に大切にしていました。先ほど達哉さんがお話ししたとおり、サロンの名前である『イノセントパール』というフレーズがコンセプトになっています。父はきつと、ダイヤモンドのような眩さはなくとも、ピュアで無垢な真珠のようにナチュラルな美しさを持つ女性を探していたに違いありません。そう、レイナさん。あなたのような」

「私？」

「はい。一目会った瞬間に確信したんです。あなたほどブランドコンセプトにぴったりと填まる女性はいない。だからあの日、強引に連絡先をお渡ししてあなたからの電話を待った。そしてあなたから連絡が——」

「ま、待つてください。でもあれは、こういうお話だなんて思っていなかったから」

捲し立てるように言う正紀さんを、今度は私が宥める。

「買いかぶりすぎです。私はたまたまあの店に居合わせただけのホステスで……昼間だって、派遣

で事務をやっているだけの平凡な女です。会社の社長だなんて……考えたことすらありません」  
言葉にして並べるうちに、驚きを通り越して恐ろしくなってくる。もしかして、私は今大変な事態に直面しているのではないか。私の何を見てそう思ってくれたかは知らないけれど、分不相応とままさにこのことだ。

「ご安心ください。我々だってあなたに会社の全権をお譲りしようとは思っていない」  
怯える私の横で、大和田さんは静かに首を振った。

「繰り返しますが、我々が求めているのは社長という名の広告塔です。あなたの言葉を借りれば、社長という肩書を持つ平凡な女性でいい。重要なのは社長としての資質があるかどうかではなく、広告効果を上げることができるかということです。もしあなたが社長になった場合、実質的に会社の舵を取るのには、取締役の一人である私になるでしょう」

「父は達哉さんを信頼していたし、そうなるのが自然だと思います。だからレイナさん、あなたは会社の業務のことは何一つ気にしないでいい。僕たちの言うとおりにしてくれさえすればそれでいいんです」

同調して正紀さんが言い添えた。飾りの社長でいればいいと、そういうことらしい。

……だとしても、だ。

「それでもやはり納得できません、どうして私なんでしょうか。何も私じゃなくても、もっと他に素敵な方が……ちゃんと身元がはっきりしている、信頼できる間柄の方だっていらっしやるでしょうに」

立ち読みサンプル  
はここまで

イエスカノーの選択以前に腑に落ちないのは、偶然ただ数時間一緒にお酒を飲んだだけの私にこんな重大な話を持ちかけてくるなんて……という部分だった。たとえ名目だけだとしても、社長という地位はそんなに安売りするべきものじゃない。お父様への思いがあればなおさらだ。

「なるほど。あなたが疑問に思うのも当然です。最初にお会いした場所も場所でしたしね。でも、あのときあなたがテーブルに現れた瞬間に、僕は決めていたんです。あなたにお願いしよう、と」

「……………」

「あなたはとても素直な方だ。嘘がつけない純粋な方なんでしょう、人柄は姿形に表れますからね。……お金が一番尊いという感覚、僕は大変率直でいいと思いますよ」

私は耳まで熱くなった。

大失敗と思っていたことを引き合いに出されて、慌てて口を開く。

「あ、あれは……場にそぐわないとは思ったのですが、気がついたときにはあとの祭りで……」

「いえいえ、いいんですよ。大抵の人間はそう思っているはずですよ。けれども、人はそういう本音を隠したりする。僕は、協力していただくなら素直な人と決めていましたから」

それが良かったとばかりに、にこにここと微笑んで話す彼。

はからずもそんなところが評価されていたなんて……

ひたすらに目をぱちくりさせるだけの私を見て、彼は自嘲の笑みを浮かべた。

「……酔狂な奴だと思うでしょうね。でもあなたを選んだ一番大きな要素は理屈じゃないんです。

父が突然倒れ、一刻も早くイメージに合う女性を見つけなければと気ばかり焦っていたときに、た

またま訪れたあの店であなたと出会った。出会うべくして出会った、とでも言いますか……巡り合わせのような気がして。僕は自分の直感に賭けてみようと思ったんです」

「……直感？」

彼の言葉をなぞりながら、密かに——私も同じだ、と思っていた。

自分でも何故だかわからないけれど、一目見たときからマサキさんという存在に強く惹かれていた。きっかけは彼の若さや容姿だったのかもしれない。でもそれだけではないと言いつける。何の根拠もなく、彼は他の人と違う、特別な人だ、と私の直感が告げていた。

だからこそルールを破ってまで彼に連絡をしたのだ。

それって、こうなることを予期していたからだったのだろうか？

「突然こんなお願いをして、怪しまれるのは覚悟の上です。でも、先日もし上げましたとおり、あまり警戒しないでいただきたいのです」

自分の第六感を信用するべきか思い悩んでいたところで、正紀さんが不安を取り去るために告げたであろう台詞が、皮肉にも私の猜疑心を蘇らせた。

そう。こんな話、怪しいと思わなければいけないのだ。ついつい信用しかけていた。私つたらどうかしている。

知らない人間に声をかけ、社長になつてくれだなんて有り得ない。彼らが私のことを知らないのと同じように、私だつて彼らのことを何も知らない。本当は何を考えているのか、確かめる術はないのだ。